



第50回

明治大学中央図書館ギャラリー企画展示



10月10日（木）～11月10日（日）

10月23日（水）、11月1日（金）は休館

明治大学中央図書館1Fギャラリー

（駿河台キャンパス・リバティタワー内）

主催 ■本の街・神保町を元気にする会
明治大学図書館

協力 ■岩波書店 三省堂 集英社 小学館 東京堂書店 平凡社
中央経済社 日本文芸社 二見書房 八木書店 有斐閣 理論社（順不同）

ごあいさつ

諸君が、諸君の殆んど身边に、豊富な書架を持ってられる事——すなわち
神田の書店街と登校の道すがらに、常に接触する事が出来るのは、これは、
諸君にとって非常に大きな特権だ。

(舟橋聖一「書物の街『神田』」 『書物春秋』16 書物春秋会、1932.2)

戦前戦後、明治大学で教鞭をとった作家の舟橋聖一は、学生たちにいつもこのように語りかけていた
そうです。

明治大学は、1881 年に有楽町で孜々の声を上げ、1886 年に駿河台に移りました。1881 年は奇しくも
三省堂書店創業の年です。駿河台での明治大学の歴史は、まさに本の街と共にあったといっても過言で
はないでしょう。

明治大学リバティアカデミーでは、2011 年より本の街・神保町を元気にする会（会長：三省堂書店代
表取締役社長亀井忠雄氏）と共催で公開講座「本の街・神保町で考える」を開講して参りました。本年
は岩波書店が 100 周年を迎えることもあり、1877 年創業の有斐閣をはじめ神保町とその周辺の出版社
や書店などが日本の近代出版に果たしてきた役割や歴史を振り返るべく「神保町と近代出版 100 年」を
テーマといたしました。

本展示は、本の街・神保町を元気にする会と明治大学中央図書館の共同企画により、同講座に併せて
開催するものです。関係出版社・書店の来歴や特色をパネルで紹介するとともに、各社の貴重な初版本
や雑誌創刊号などのメモリアル的出版物を多数展示いたしました。本の街・神保町が形成する「近代出
版史」の一端をご覧いただければ幸いです。

ご協力いただいた下記の 12 社及び明治大学中央図書館に厚く感謝申し上げます。

岩波書店、三省堂、集英社、小学館、中央経済社、東京堂出版、

日本文芸社、二見書房、平凡社、八木書店、有斐閣、理論社

2013 年 10 月

明治大学リバティアカデミー公開講座

「神保町と近代出版 100 年」コーディネータ 飯澤文夫

本の街・神保町前史

本の街神保町には、古書店や新刊書店ばかりか、近代日本の出版史を飾る版元がたくさんあります。なぜ神保町が、古書店をはじめ、出版社、印刷所、製本所、取次店などが密集する一大出版産業地となり、本の街と呼ばれるようになったのでしょうか。

徳川幕府の五代将軍綱吉は、江戸城の鬼門を鎮めるために、神田橋から錦町、一ツ橋に至る広大な土地に護寺院を建立しました。護寺院は享保2年（1717）江戸の大火で一帯が焼失した後、火除け地となり、護寺院ヶ原と呼ばれていましたが、この一角に安政3年（1856）幕府の洋学機関である蕃書調所が開設されます。これが、洋書調所、開成所とたびたび改称され、明治に入ってから、大学南校、開成学校と名称変更し、明治10年（1877）に東京大学となります。同じ年、現在の一橋大学の前身である東京商業学校も一ツ橋に開校します。

またそれに先立つ明治6年（1873）には、開成学校から分かれて、東京外国語大学の前身となる東京外国語学校が一ツ橋に誕生しています。

明治初年代には、神田神保町周辺に国立大学やその予備門が開設され、学生の街となるのです。

そこに、明治10年代から、明治大学、法政大学、中央大学、専修大学、日本大学などの前身となる法律専門学校が神保町周辺に開校しました。学校ができ、学生や先生が集まってくると、書物への需要が高まってきます。

創設期の大学では、原書を教科書として使っていたこともあって、洋書を売買する古書店があいついで出店し、扱う商品の幅も拡大していきます。また、活版印刷の普及にともない、新刊書の出版をはじめめる書店も出てきます。それと相前後して、大学の教科書や専門書を編集出版する出版社も登場します。出版社が増えるのに伴い、印刷所や製本所、取次会社などが次々と誕生し、その利便性がまた神保町での出版社の設立を促し、神田神保町界限は一大出版産業地帯となったのです。

バブル崩壊後の神保町再開発で、印刷所や製本所はほとんど姿を消しましたが、神保町界限には、現在も書店や出版社がたくさんあり、世界有数の本の街を誇っているのです。

神保町に見る近代日本出版史

神田神保町周辺の、近代日本の出版史を飾る版元や取次を創業年次順に見てみましょう。

最も早いのは、法律書の老舗・有斐閣の前身である有史閣で、明治 10 年（1877）一ツ橋通りに古書店として創業されています。明治 14 年（1881）には、書店と後に出版も手掛ける三省堂。同じ年に、明治 2 年（1868）に洋書輸入・販売店を開業した丸善の古書販売店として、神田小川町に出店した中西屋。明治 16 年（1883）、早稲田大学の創立に関わった小野梓が創業した東洋館は、小野の没後閉鎖されますが、その遺志を引きついで坂本嘉治馬は明治 19 年（1883）に富山房を創業します。明治 20 年（1887）、三省堂の隣に開業した取次店の上田屋は、島崎藤村が自費出版した『破戒』や『春』を発行しています。明治 23 年（1890）、上田屋の斜め前に、後に総合出版社として一世を風靡した博文館（1887）の取次店として東京堂が開業し、後に出版も手掛けるようになります。明治 29 年（1883）には、神田三河町で創業し、後に小川町に社屋を構えた同文社、その 2 階を編集室にしてスタートした明治書院も、1 年後には錦町に新社屋を構えます。明治 45 年（1912）には誠文堂新光社の前身の誠文堂も錦町で創業しています。

大正期に入ると、大正 2 年（1913）岩波書店、大正 3 年（1914）には平凡社が、いずれも神保町に、その翌年（1915）には白水社も誕生し、長らく小川町に社屋を構えていました。同じ年、北原白秋の弟・北原哲雄が、白秋を顧問にしたアルスを興し、後に神保町に事務所を置き、白秋の著作などを刊行します。

大正 5 年（1916）には、同文館から独立した石川武美が主婦の友社を設立し、9 年後の大正 14 年（1925）には、駿河台に鉄筋 4 階建ての堂々たる社屋を建てるまでに成長します。大正 7 年（1918）後に諸橋轍治の『大漢和辞典』（全 18 巻）をはじめ英仏語辞典を出版する大修館が開業。大正 11 年（1922）には、相賀武夫が小学館を創業し、その 4 年後に同じ事務所内に集英社を併設します。

昭和に入ってから、昭和 9 年（1934）に八木敏夫により操業された八木書店。明治 19 年（1886）に河出静一郎によって日本橋に設立され成美堂は、昭和 8 年（1933）に河出書房となり、戦後小川町に移転して 67 年に新社となります。昭和 15 年（1940）に古田晁が創業した筑摩書房も、かつて小川町に社屋がありました。この他、児童書の理論社や福音館書店やフレーベル館も神保町近辺に会社がありましたし、あかね書房は現在もあります。ユニークな出版社の晶文社や青土社などの編集室も神保町にあり、戦前には羽田書店や十字屋なども神保町にありました。二見書房、中央経済社、日本文芸社、飛鳥新社などの他にも、たくさんの出版社が現在も神保町近辺で旺盛な出版活動を行っています。今回の展示では、「神保町を元気にする会」の会員出版社の歴史を紹介させていただきます。

明治大学リバティアカデミー公開講座

「神保町と近代出版 100 年」講師 野上 暁

岩波書店

岩波書店

岩波書店の看板の文字
 漱石に採筆してもらった文字を使用
 視でも綺麗な本を作ろう

夏目漱石と岩波書店

岩波書店初の出版物『こゝろ』刊行以来、夏目漱石の存在はいつでも大きなもので、漱石との出会いをご紹介します。

初めは、一九一三年、古本屋の開業間もない頃、旧制一高時代からの親友で漱石門下生だった安倍能成を通して、岩波書店の看板の文字を漱石に書いてもらったのがきっかけでした。茂雄は、漱石宅で開かれていた弟子たちの集い「木曜会」にも顔をだすようになり、『こゝろ』の出版を任せられます。

当時すでに人気作家だった漱石が、自分の著作を新参の岩波書店に任せただけのことは極めて異例のことでした。茂雄は、採算度外



よりよく生きるとは、どういうことか。
 よりよい社会とは、どんな社会か。
 岩波書店は1913年の創業から、問い、考えることを世の人々と共にするため、学術研究・思想・文学・芸術等の人間の創造活動の成果を広く伝えてきました。

世界は今、大きな変わり目にあります。
 経済的發展やグローバル化と幸福との一致点が、見つけにくくなっています。情報は氾濫し、世の中も個人も翻弄されがちです。では、どうすればいいのか。

正しい答えは、ないかもしれません。
 けれど、その「ないかもしれない正解」を問いつづける姿勢が大切だと私たちは考えます。
 問う。すべては、そこからはじまります。

人は、本を読むことで思考を広げられます。
 新しい自分や世界に出会う喜びがあります。
 そして少し階段をのぼったとき、また新たな問いが生まれる。
 私たちの本が、そんな限りない成長の扉となるように。
 これからも岩波書店は、問う大切さを知る読者、著者と共に、希望ある時代を社会を追い求めていきます。

『こゝろ』の出来ばえに喜び、その後『硝子戸の中』『道草』も岩波書店から出版されました。一六年一月、漱石が死去した後、翌年一月には絶筆となった未完の『明暗』を



『こゝろ』
 漱石が自ら装丁した

と意気込み、漱石にたしなめられたりもしています。やがて漱石も茂雄の熱意に動かされ、自身で装丁まで手掛けます。こうして、一九一四年、岩波書店の事実上初の出版物『こゝろ』が刊行されました。

『漱石全集』の刊行。同年十二月には『漱石全集』の刊行開始。以来、七度版を改め、その都度、新資料や注解の充実を図っています。漱石の手がけた『こゝろ』の装丁は、『漱石全集』や漱石作品の文庫カバーにいまも使われています。



右：『明暗』発売
 発売日に店頭で勢揃いする岩波茂雄（右）と店員たち（1917年1月26日）

左：漱石全集（全14巻）

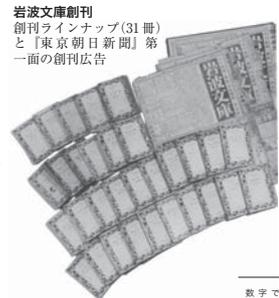
『そうだったのか！岩波書店』 漱石を師と慕う人たちが集まった「漱石山房」。その様子を画家津田青楓が描いています。他の10人とともに茂雄は本を読んでくつろいでいる様です。

岩波文庫のこと

古典を読むなら「岩波文庫」。そんな声はいたくには理由がありません。いまでは馴染みになった「文庫」のはじまりのことのお話です。

岩波文庫は、いつ創刊したの？

岩波文庫が創刊されたのは、一九二七年です。時代は、日本の出版事業にとつて初めて大量生産廉価版の登場となった、改造社の円本騒動が落ち着きさせたころ。創業者岩波茂雄は、この騒動に対して当初同様の計画も考えたようですが、目先をかえてドイツのレクラム文庫に倣い、古典及び準古典だけの双書を計画します。計画立案には哲学者の三木清が加わりました。二七年七月九日の『東京朝日新聞』の第一面に掲載された創刊広告「中段写真」では、「古今東西の典籍」という標語をもって岩波文庫創刊が伝えられています。茂雄による「真理は万人によって求め



岩波文庫創刊
 創刊ラインナップ（31冊）第
 一巻の創刊広告

られることを自ら欲し」ではじまる。『読書子に寄す』が同広告で初めて発表され、知識と美を求めた民衆に応じ励まされて岩波文庫は生まれた、と謳われています。分売を許さない円本などの予約販売に対して、いつでも読みたい時に安価で携帯性のある本を一冊ずつでも購入できる、というのが岩波文庫でした。

数字でみる 岩波文庫

【通算刊行冊数（2012年）】
 約5,650冊

【通算ベスト5】

- 1 フラトン 『ソクラテスの弁明・クリトン』
- 2 夏目漱石 『坊っちゃん』
- 3 ルソー 『エミール（上）』
- 4 『論語』
- 5 夏目漱石 『こゝろ』

岩波文庫の装丁

『装丁とマーク』岩波文庫といえば、ある時期まで誰しもあの唐草模様（本頁上部の模様）を思い浮かべたはず。この装丁は平福百穂（ひらふくもも）画伯によるもので、平福氏は新しい図案を描くよりも古いものから取材したほうがよい、と正倉院所蔵の古鏡「鳥獸花背方鏡」の模様をえらび、これを模して装丁の図案を描きました。裏表紙のマーク「壺」（カブ）ではありません）は平福画伯の作です。

岩波新書のこと

岩波新書は、いつ創刊したの？

今日の問題に答えを、必要な知識を的確にわかりやすく説明する、いまではお馴染みの「新書」。時代が変わっても、創刊時から変わらぬかたちです。岩波新書は、常時時代と伴走しながら、時代に流されないことをめざしています。

判型と装丁

判型 B40判（B判の紙を40取りするという意味）で、B6判（32取り）より幅が少し短いサイズ。イギリスの双書ペリカン・ブックスの判型に倣っています。現在の「新書」のかたちは岩波新書から始まりました。

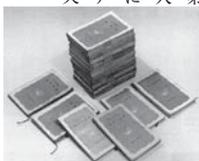
【青版】 戦後再開から一〇〇〇番まで（千冊）。
 【黄版】 青版千冊を機に衣替え。一九八七年まで（三九六冊）。
 【新赤版】 創刊五〇年から現在まで。初心に帰る意味で、創刊時と同じ「赤」を採用。なお、新赤版は二〇〇六年に一〇〇〇番を超え、それを機に、新赤版一〇〇〇番からデザイン変更。元デザインをいかしながら、表紙の風合い、マークなどが変更されました。桂川潤氏による装丁です。



数字でみる 岩波新書
 【通算刊行冊数（2012年）】
 約3,000冊

【通算ベスト5】

- 1 永六輔 『大往生』
- 2 大野晋 『日本語練習帳』
- 3 清水幾太郎 『論水の書き方』
- 4 梅村忠夫 『知的生産の技術』
- 5 井上清 『日本の歴史（上）』



岩波新書の創刊は、日中戦争下の一九三八年。創刊の辞には、道義の精神に則らない日本の行動を憂慮し、現代人の現代的教養を目的として刊行する、と謳われています。拡大する戦争を支える時流に抗するためには、世界的視野に立つ自主的判断の資を提供しなければならぬ、という思いからでした。岩波新書の第1号は、中国の人々への医療伝道に尽力したクリスティーの著作『奉天三十年』です。

【赤版】 創刊から戦時下休刊まで（一〇一冊）。
 【黄版】 戦後再開から一〇〇〇番まで（千冊）。
 【新赤版】 創刊五〇年から現在まで。初心に帰る意味で、創刊時と同じ「赤」を採用。なお、新赤版は二〇〇六年に一〇〇〇番を超え、それを機に、新赤版一〇〇〇番からデザイン変更。元デザインをいかしながら、表紙の風合い、マークなどが変更されました。桂川潤氏による装丁です。

『そうだったのか！岩波書店』 かつて岩波新書にはスピル（しおり）がついていました。岩波文庫同様、「天」を化粧載しない（アンカット）のは、その名残といえます。

『そうだったのか！』 岩波文庫創刊のきっかけになった、改造社の円本、菊判3段組で約300~400頁の本を1冊1円で予約販売。35万余の予約があったといわれています（当時の日本の人口は約6千万人）。

有斐閣 という 出版社

明治10年創業

有斐閣は1877（明治10）年に創業されました。浮き沈みの激しい出版界にあつては、きわめて稀な存在といわれます。創業当初の社名は「有史閣」といい、東京は神田一ツ橋通町四番地で古本を扱う書店として出発し、2年後、有斐閣と改め出版に進出しました。

社会科学・人文科学系を 主要分野として

有斐閣の出版活動は、法学からスタートして経済学に進み、さらに、社会学や心理学、経営学等の分野へと裾野を拡大してきました。時代とともに着実に進展してきた日本の社会科学・人文科学系アカデミズムの学術的成果を社会に広く還元し、学問のさらなる発展に貢献すべく、一途に学術書出版に専念してきたのです。その結果、およそ13,000に及ぶ書籍タイトルが小社の貴重な財産を形成するに至っています。

戦後学問復興の先駆け

1946（昭和21）年、太平洋戦争が終わった翌年の夏には、天皇機関説事件により発売禁止になっていた美濃部達吉著『憲法撮要』が改訂版として復刊され、戦後の学問復興の先駆けとなりました。以後、順次『六法全書』の復刊、『新法律学辞典』『社会学辞典』などの刊行と、大型で困難な企画を成功させました。

法曹界・大学教育と共に、新書から六法全書まで

1957（昭和32）年には、創業80周年記念出版として、『法律学全集』（全60巻）の刊行を開始、実に28年の歳月を費やして完結しました。この間、重厚な《有斐閣コンメンタール》群を順次刊行し、法曹界・法律実務家の要請に応じてきました。

また、大学教育の多彩な教材の要望に応じて、『有斐閣双書』『有斐閣アルマ』『New Liberal Arts Selection』など複数のシリーズを創出、圧倒的な評価を得てきました。もちろんこれらのシリーズのほかにも、数多くの体系的教科書・研究書が上梓され、ロングセラーになっています。

法曹界と大学は、上述のように、小社の出版活動の主要なフィールドですが、ここで得られた信頼をさらに広げ深めるために《有斐閣新書》《有斐閣選書》《有斐閣リブレ》等も企画、専門知識の普及につとめ好評を博しました。

このほか、代表的な定期刊行物として、年版の法令集『六法全書』『ポケット六法』『判例六法』『判例六法Professional』、雑誌では『ジュリスト』『法学教室』、ムック形式の《判例百選シリーズ》等の発行、また分野別の辞典群の充実およびその電子出版化を行っています。



有斐閣

有斐閣のマークは、獣の王といわれる「獅子」、鳥の王といわれる「鷲」を題材にしたもので、社会科学から、やがては人文科学と自然科学の両分野における最高の権威ある書物の出版を目標にしようといった意味が含まれています。さらに、獅子に配した赤色、鷲に配した青色は、それぞれ動脈と静脈をあらわしており、静かな中にも動的なもの、動的な中にも静かなもの、両者の融合と活動によって生々脈々の発展を意図したものでもあります。

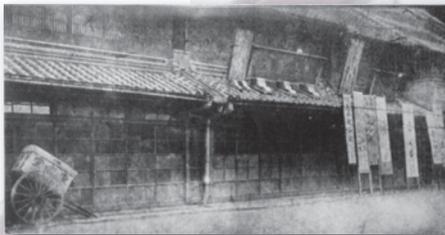
東京堂 東京堂書店 東京堂出版

創業1890年(明治23)

創業の地・神保町で 読書人とともに123年

草創・発展

創業者・高橋新一郎が出版社・博文館の支援をうけて、東京市神田区表神保町に書籍雑誌の小売店・東京堂を開いたのは1890年(明治23)。当時、東京の本屋街の中心は日本橋、京橋から神田に移りつつありました。翌91年には、大橋省吾(博文館・大橋佐平の子)が経営をつぎ、雑誌取次業と出版業を始めます。都市部のみならず全国に販売網をもつ本格的な出版取次店は東京堂が最初でした。以後、東京堂は取次業を中心として、小売り、出版と、読者と書物とを結ぶ多面的な展開をしました。



1907年(明治40)ころの東京堂。現在の本店店舗の場所にありました。



昭和初期の出荷風景。大正期までは荷車でしたがトラックになっています。

限りなく広がる知識の世界

柳田国男『民俗学辞典』(毎日出版文化賞受賞)の刊行以来、東京堂出版では、辞典を刊行書日の中心の一つに据えてきました。その点数は現在850点を超え、国文学、日本語、歴史学の辞典から読み物風事典まで、さまざまな領域に広がる知識を読者に提供することを心がけ刊行を続けています。一方、『平安遺文』『鎌倉遺文』『仮名草子集成』などの大きな史料集から、近年は書道、気象予報あるいはマジック、健康関係の趣味実用本まで、多様なジャンルの書目を刊行しています。



123年の歩み

【草創・発展の昭和戦前期まで】

- 1890年(明治23)**
3月10日 小売書店・東京堂開業。
- 1891年(明治24)**
小売店に加え、取次業(出版物の卸売業)と出版業をはじめ。取次業務用目録『東京堂発兌書籍月報』を創刊。『近世豪傑譚』『名家詩集』などを出版。
- 1892年(明治25)**
4月10日の神田の火災で社屋を焼失。ただちに新店舗を建てる。
- 1898年(明治31)**
取次業務用の『雑誌世界』を創刊。雑誌の一手販売に力を入れる。
- 1913年(大正2)**
2月20日の神田の大火で社屋を消失。12月「日本一の本屋東京堂」と評判を呼んだモダン建築の新店舗が完成。
- 1914年(大正3)**
読書人のための新刊情報雑誌として『新刊図書雑誌月報』を創刊。
- 1923年(大正12)**
9月、関東大震災で三たび社屋を消失。
- 1927年(昭和2)**
『東京堂月報』(『新刊図書雑誌月報』を改題)を創刊。
- 1928年(昭和3)**
神田錦町に社屋を新築して取次部門を移転。円本ブーム、雑誌発行部数の大幅な増加を背景に取次業界トップとなる。翌年、移転跡に小売部の新店舗が完成。
- 1930年(昭和5)**
5月『出版年鑑』を創刊。
- 1935年(昭和10)**
国文学界の画期的名著といわれた『日本文学全史』全12巻を刊行。
- 1941年(昭和16)**
中心事業であった出版取次業が国策により統合会社日配に無償で吸収される。以降は出版業と小売業にて事業を行う。

【戦後の歩み】

- 1951年(昭和26)**
柳田国男『民俗学辞典』と東条操『全国方言辞典』が絶賛を博し、以後、辞典出版に力を注ぐ。
- 1964年(昭和39)**
出版部門と小売部門を(株)東京堂から分社させ、(株)東京堂出版・(株)東京堂書店となる。
- 1971年(昭和46)**
(株)東京堂出版、竹内理三『鎌倉遺文』全42巻の刊行開始。
- 1977年(昭和52)**
(株)東京堂、九段下に地上20階・地下4階の「東京堂千代田ビル」を竣工。
- 1982年(昭和57)**
(株)東京堂書店、神保町すずらん通りの創業の地に地上6階建て(全フロア書店)の新店舗をオープン。
- 2011年(平成23)**
グループとしての長期的拡大発展を目的として、子会社東京堂書店を東京堂と合併。
- 2012年(平成24)**
3月、神田神保町店、カフェを併設してリニューアル・オープン。6月にソコカふじみ野店、8月にアトレヴィ東中野店オープン。

出版史にのこる新刊目録刊行事業

草創期の東京堂が力を注いだのは「月報」形式の新刊目録刊行事業でした。創業の翌年から早くも『東京堂発兌書籍月報』を創刊しています。月ごとの新刊雑誌・書籍を目録としてまとめたもので、当初は取次業務用として書店向けに作られましたが、次第に読書人のための新刊情報誌になりました。その刊行は、明治・大正期から、いく度か名称・形式を変えて昭和戦前期まで続きました。これらの目録に収められた膨大な新刊情報、書籍広告、折々のエッセイは、そのままが国の出版史をヴィヴィッドに証言する貴重な資料でもあります。



『雑誌世界』(1898年創刊)



『東京堂月報』(1927年創刊)



『出版年鑑』(東京堂版) 昭和5年(1930)より「年鑑」の形で編纂

創業の地で読書人とともに

東京堂の小売の店舗は、戦前3度の火災に見舞われ、そのたびに直ちに営業を再開しました。当時、東京のモダン建築の一つと評された大正期の店舗、震災後に復興なった昭和初年の店舗は、2階をギャラリーにして様々な催しものを開き、文化人の溜り場として賑わっていました。その伝統は今でも受け継がれています。



1913年(大正2)の東京堂



1929年(昭和4)の東京堂小売部



1960年(昭和35)の東京堂書店



二見書房のあゆみ

- 1941年（昭和16年）
二見書房は、千代田区に創業されました。堀内印刷所に出版業を併設し、印刷と出版の二つを見るところという意味を込めて、『二見書房』と命名されました。
ロダンの『フランスの聖堂』、森銚三の『学芸史上の人々』、モーパッサンの『女の一生』などの刊行を始めます。しかし、第二次世界大戦は日ましに深刻な様相を呈し、3月の空襲により全てが灰燼と帰しました。
- 1960年（昭和35年）
1月、新しい二見書房は出発しました。吉岡専造の写真集『人間零歳』を出版。NHK特別報道班の『アフリカ大陸に行く』、『中近東に行く』、『中南米に行く』など話題を呼びました。
- 1963年（昭和38年）
初めて手がけた小説『女のいくさ』は直木賞を受賞し、3ヵ月間、全国ベストセラー第1位を続けました。
- 1969年（昭和44年）
『エマニエル夫人』を出版し、異色な出版物として世評を沸かせベストセラーとなりました。この年『ジョルジュ・バタイユ著作集』の発刊を開始。
- 1972年（昭和47年）
日本中を驚かせた『白い本』登場。発売と同時に売り切れ店が続出し各書店でベストセラーを独占。
- 1974年（昭和49年）
新書判分野へ進出し、新企画として『刑事コロombo』シリーズ／全36巻・別冊2巻や『コックリさんの秘密』など、次々ヒットが生み出されました。
- 1976年（昭和51年）
テレビの人気番組『まんが日本昔ばなし』を出版。全30巻累計800万部をこえるミリオンセラーとなりました。【2005年（平成17年）10月からテレビ放映されリニューアル発売を開始】
- 1977年（昭和52年）
この頃スーパーカーの爆発的なブームが起き、特殊製本の『カード式 ザ・スーパーカー』第1弾～第4弾を発売しました。とくに第3弾は当時の子供に一番人気だったランボルギーニ特集でした。
- 1980年（昭和55年）
新社屋が完成し三崎町から、文京区音羽に移転。『ペントハウスペット690』は高額な定価にもかかわらず、初版6万部を1ヵ月で完売しました。
- 1983年（昭和58年）
日本TVアナウンサー小林完吾の『愛、見つけた』は、全国の人々に感動を与え続けました。翌1984年（昭和59年）には、手芸テキスト『ソーブバスケット』を50万部売り、この年のベストセラーとなりました。
- 1985年（昭和60年）
ファミコン・ブームにのり『裏ワザ大全集』シリーズの『スーパーマリオブラザーズ』は100万部を突破。裏ワザブームをつくります。この年から、オトナの文庫『マドンナメイト』の毎月定期刊行を開始。
- 1986年（昭和61年）
アーヴィング・ウォーレス『第七の機密』、ローレンス・ブロック『聖なる酒場の挽歌』など、海外ミステリ専門文庫『ザ・ミステリ・コレクション』をスタートしました。
- 2003年（平成15年）
文京区音羽から千代田区神田神保町に移りジャンボ旅客機の機体に秘められた驚きの秘密を公開した『ジャンボ旅客機99の謎』を刊行。
- 2008年（平成20年）
本社を二見書房発祥の地、千代田区三崎町に移転。
二見文庫として刊行された書籍の改訂新版『読めそうで読めない間違いやすい漢字』は、2009年のノンフィクション部門年間ベストで第1位となりました。

＜三省堂書店と三省堂 132年の歩み＞

* 太字書名は展示あり。

西暦	元号	三省堂書店								
		代表者	書店	代表者	出版	印刷				
1881	明治	亀井忠一 個人経営時代	裏神保町一番地に約18坪で古書店開業 新刊書店に転換		『ウエルソン氏第一リードル独案内』 『英和袖珍字彙』	(初の出版、同盟出版)				
1883	明治									
1884	明治									
1888	明治									
1891	明治									
1894	明治									
1898	明治									
1908	明治									
1912	大正	元			『漢和大字典』 『辞林』 『日本百科大辞典』刊行開始(第1巻)	神田錦町印刷所 三崎町印刷所				
倒産										
1915	大正	4	三省堂書店		株式会社三省堂					
1916	大正	5	亀井豊治 小売部時代	法人化から躍進の時代	小林箕三郎	『神田クラウンリーダー』				
1917	大正	6			能勢鼎二	『日本百科大辞典』完結(全10巻)				
1918	大正	7			神保周蔵		『模範六法全書』	辞書用インディア紙開発		
1919	大正	8			亀井寅雄	世界の語学レコード教材を輸入、 語学録音機材・機器のバイオニアに	『袖珍コンサイス英和辞典』	ペントン母型彫刻機輸入 蒲田工場		
1920	大正	9					『明解国語辞典』			
1921	大正	10							『金田一中等国語』	
1922	大正	11					今井直一			『辞海』
1923	大正	12			亀井要 混乱の時代	自由が丘店開店 → 多店化展開 新宿西口店開店	『三省堂国語』			
1924	大正	13					小倉正風	『時代別国語大辞典』刊行開始(上代編)		
1925	大正	14					亀井要		『新明解国語辞典』	
1928	昭和	3	亀井辰朗 多店化時代	本店ビル竣工(新神田本店)			上野久徳(管財人)	会社更生法適用 『新コンサイス英和辞典』	八王子工場	
1929	昭和	4					新社屋竣工(三崎町)			
1930	昭和	5						『 株式会社三省堂 』	三省堂印刷株	
1931	昭和	6					守屋 眞明 再生の時代	千葉そごう店開店	辞書組版のCTS化	
1943	昭和	18							『大辞林』 『言語学大辞典』刊行開始(第1巻)	
1944	昭和	19							加藤精英	『言語学大辞典』(第6巻)
1949	昭和	24								
1950	昭和	25			八幡統厚	『現代英語語法辞典』				
1951	昭和	26					北口克彦	『新明解現代漢和辞典』		
1952	昭和	27			亀井忠雄 近代化と飛躍の時代	名古屋高島屋店開店 有楽町店開店 ポイントカード「クラブ三省堂」開始 札幌店開店 東京ソラマチ店開店 電子書籍端末「Lideo」発売 国内直営店32、FC3、海外FC4店舗 営業所12拠点、大学売店等々			『新明解現代漢和辞典』	辞・事典400点、教科書160点を含め、 現在稼働中の点数、約2500点
1956	昭和	31								
1960	昭和	35								
1961	昭和	36								
1964	昭和	39								
1967	昭和	42								
1970	昭和	45								
1971	昭和	46								
1972	昭和	47								
1973	昭和	48								
1974	昭和	49								
1975	昭和	50								
1976	昭和	51								
1979	昭和	54								
1980	昭和	55								
1981	昭和	56								
1986	昭和	61								
1988	昭和	63								
1993	平成	5								
1994	平成	6								
1995	平成	7								
1996	平成	8								
2000	平成	12								
2001	平成	13								
2002	平成	14								
2003	平成	15								
2005	平成	17								
2009	平成	21								
2010	平成	22								
2011	平成	23								
2012	平成	24								
2013	平成	25								

学びながら働き、働きながら学ぶ人々のために 平凡社

* 創業と歴史 *

創業者は、教育者として知られた下中彌三郎。下中はまた、大正・昭和時代の日本の代表的出版人の一人でした。その理想としたところは「万人労働の教育」とよばれ、人はすべて働きながら学び、学びながら働かねばならぬというもの。第二次世界大戦前に、本格的百科事典『大百科事典』全36巻や『大辞典』全26巻をはじめ、『世界美術全集』全36巻等を相次いで出版し、当代の優れた学問研究や文化的成果を広く一般に普及するという小社の出版理念が確立されました。この理念は戦後も継承され、百科事典は新『世界大百科事典』全35巻（1988）に結実していきます。また、『西洋思想大事典』全5巻（1990）、『日本史大事典』全7巻（1994）、『日本の野生植物』全7巻、『世界大博物図鑑』全7巻などの各時代・分野を代表する事典群、さらに『日本歴史地名大系』全50巻（2005）、白川静著『字統』『字訓』『字通』の字書3部作、世界・日本各種地図帳などの自信作を次々に出版。一方で、1963年に創刊した月刊誌『太陽』（2000年休刊）は、日本初の本格的グラフィックマガジンとして、また月刊誌『アニマ』（1993年休刊）は、ネイチャーマガジンとして高く評価され、数々の優れたカメラマンの活動の場ともなりました。

* 読者とともに現在から未来へ *

現在の主な出版物としては、アジアの古典叢書である「東洋文庫」や「平凡社ライブラリー」「平凡社新書」などのペーパーバック、日本の伝統・人物などを美しいビジュアルで紹介する「コロナ・ブックス」やムック「別冊太陽」、この他種々の事典やさまざまな書籍群を精力的に出版しています。近年では時代を見据えた電子コンテンツ開発も視野に入れ、将来に向けて広く読者の利便に供し、好奇心や知識を満たすべく出版活動を続けてまいります。

歴代刊行物セレクション

- 『大辞典』全26巻（1934年）
- 『書道全集』全26巻（1935～36年）
- 『世界教養全集』全38巻（1960～63年）
- 白川静著『字統』（1984年）、『字訓』（1987年）、『字通』（1996年）
- 『白川静著作集』（2000年～）
- 佐竹義輔ほか編『日本の野生植物 草本・木本』（1981～89年）
- 加藤周一著『加藤周一著作集』（1979～2010年）
- 上智大学中世思想研究所監修『中世思想原典集成』全20巻（1992～2002年）
- 『日本歴史地名大系』全50巻（1979～2005年）
- 『改訂新版 世界大百科事典』全34巻（2007年）
- 『最新心理学事典』（2013年12月上旬刊行予定）

代表取締役社長 下中直人
創業 1914年
〒101-0051 東京都千代田区
神田神保町3-29
TEL 03-3230-6572
FAX 03-3230-6587
URL <http://www.heibonsha.co.jp/>

[主な出版ジャンル]
事典・図鑑・人文社会科学・自然科学・
芸術・実用・文学・ムック



神保町と近代出版100年

株式会社 日本文芸社 のあゆみ

- 1953年 5月 創業者の夜久勉が千代田区神田神保町2丁目に個人会社「日本文芸社」を設立
- 1958年 10月 『ドモリの正しい治し方』（浜本正之 著）を書籍第1号として刊行
家庭医学のジャンルを中心に出版活動を行なう
- 1959年 1月 社員7名にて株式会社として創業開始
家庭医学書 及び 実用書全般を中心に出版活動を展開
- 1964年 1月 雑誌『漫画娯楽読本』を隔週刊誌として創刊
- 1968年 1月 雑誌『漫画ゴラク dokuhon』を月刊誌として創刊 同年3月より隔週刊に変更
- 1970年 7月 社屋を千代田区神田神保町1丁目8番地に移転（神保町交差点から神田寄りの靖国通り沿い 北側）
- 1971年 8月 『漫画ゴラク dokuhon』を『週刊漫画ゴラク』に誌名変更し 週刊誌としてスタート
- 1972年 12月 『週刊漫画ゴラク』は発行部数56万となり コミックスの「ゴラクコミックスシリーズ」を刊行開始
- 1983年 9月 新書ラクダブックスシリーズ第二弾『和田アキ子だ 文句あっか!』（和田アキ子 著）刊行
発売1ヵ月で100万部達成
- 1986年 7月 『週刊漫画ゴラク7月4日号』 1000号発売
- 1988年 5月 『無能の人』（つげ義春 著）刊行
同書を原作本として映画化された『無能の人』（竹中直人 監督）は
1991年度ヴェネツィア国際映画祭において国際批評家連盟賞を受賞
- 1990年 7月 千代田区神田神保町1丁目7番地に新社屋落成（神保町交差点から神田寄りの靖国通り沿い 南側）
- 1993年 4月 『蝶とヒットラー』（久世光彦 著）刊行
同書は、第3回 ドゥマゴ文学賞 受賞作品（1993年）
- 2005年 3月 千代田区神田神保町1丁目7番地のNSEビルへ本社移転
（1990年に完成した社屋の30mほど神田寄り）
- 2006年 2月 『週刊漫画ゴラク2月24日号』 2000号発売
- 2012年 5月 『酒のほそ道』の著者、ラスウェル細木氏 第16回手塚治文化賞 短編賞を受賞



＝ 株式会社 日本文芸社 ＝
創業年 1959年1月
資本金 4億6729千万円

☆ 刊 行 物 ☆

<雑誌>

週刊漫画ゴラク、別冊漫画ゴラク
イラストロジック ムック
コミックス など

<書籍>

実用書 一般書 新書 文庫

年表

小学館の歩み

Table with 2 columns: Year (1922-1981) and Event (e.g., 八月八日 小学館創業, 九月七日 『小学五年生』『小学六年生』 十月号を同時創刊).



Table with 2 columns: Year (1982-2012) and Event (e.g., 十月 『学習まんが 少年少女日本の歴史』全二十巻+別巻二巻刊行, 十一月 『CanCam』創刊).



1925 草創期 1946

1925年～1946年(大正14年～昭和21年)



1933

集英社の歴史は、関東大震災から2年経った1925年(大正14年)、小学館より趣味・娯楽性に重きを置く雑誌が集英社名で発行されたことに始まる。翌1926年(大正15年)には小学館の娯楽誌出版部門として分離、集英社が発足。設立間もなく時代は、昭和へ。文字通り、時代の大きなうねりの中で、趣味や娯楽性の時代を先見し創設された集英社。草創期の沸き立つエネルギーは、世界大戦の始まる1930年代後半まで続くこととなる。

1947 基礎づくり 1954

1947年～1954年(昭和22年～29年)



1949



1952

戦後の混乱の中、紙芝居にヒントを得た児童書『少年王者』が誕生し、たちまちベストセラーに。空前の出版ブームが巻き起こる出版界へ、合資会社集英社の順風満帆な船出だった。株式会社集英社に改組して後は、新雑誌『おもしろブック』、超アイドルの美空ひばりを登場させた『少女ブック』と、児童誌の創刊で躍進を続ける。独立社屋に移転した1952年、ビジュアル雑誌の走りとなる『明星』を創刊。“明星の集英社”として世間に認知され、独自の道を歩み始めた。

1955 成長期 1965

1955年～1965年(昭和30年～40年)

芸能の映画と雑誌が娯楽の時代であった昭和30年代。児童誌の成功に端を発した集英社は、総合出版めざして新たな挑戦を試みる。本格的な書籍出版に着手し、連載漫画の単行本や児童書に加え、一流作家の文芸書や文学全集など続々と刊行。外国文学への進出も果たす。後に大型長寿雑誌として成長する『りぼん』や『週刊マーガレット』、皇太子妃スクープで社会的反響を呼んだ『週刊明星』の創刊もこの時期。高度成長期という時代の中、集英社も確実に成長を遂げていった。



1955

1966 発展期 1974

1966年～1974年(昭和41年～49年)

日本が経済的により豊かになり始めた1960年代後半、若者のサブカルチャーが現象化。そんな時代背景から『週刊プレイボーイ』『週刊セブンティーン』『non・no』といった雑誌が誕生。集英社は意欲的出版社として若者の支持を得、生活とファッションをリードしていく。さらに『少年ジャンプ』をはじめとする多彩な漫画誌の創刊により、コミック文化を確立。美術と文学分野にも挑戦し、その後の土台となるエンタテインメント雑誌群を続出する。



1969

1975 躍動期 1987

1975年～1987年(昭和50年～62年)



1979



1980

源流から新しい流れが生まれ、細分化されていったのがこの躍動期。『PLAY BOY 日本版』創刊号が即日完売、出版界史上、空前絶後の記録を達成した1975年、“女性の自立”という言葉が叫ばれ始めた。そんな潮流をとらえた女性誌が続々誕生。女性の新しい考え方や生き方を提案し、社会をリードする。性別・年代別に様々な生き方を追求したクラスマガジンの時代。1985年、“科学万博つくば85”に出展したことで社名も一般に通用するようになっていった。

1988 展開 1996

1988年～1996年(昭和63年～平成8年)



1989



1991

バブル経済崩壊後の混沌とした日本経済に明かりは見えない。時代は昭和から平成に移った。ますます多様化する人々の生活スタイルやファッション。そのニーズに応じて、集英社はジャンルを拡大してゆく。さらに新たな事業展開を図り、挑戦は続く。

1997 再編 2005

1997年～2005年(平成9年～17年)

21世紀に向かって、新体制による創業70年記念出版の教々が世に問われた。景気停滞が長引く中、出版業の原点に立ち返り、文化の発信者としての自覚が要求される。1997年、WEB上にホームページを開設、採用試験もインターネットでの受付に変わった。時代はパピルスからエレクトロニクスへと移るのか?

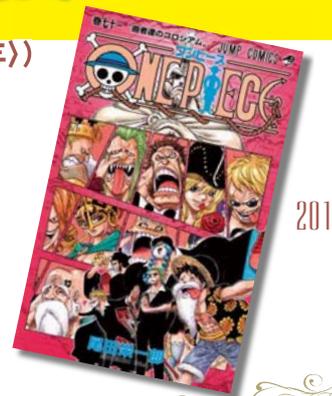


2001

2006 脱皮 2013

2006年～現在(2013年)
(平成18年～現在(平成25年))

世界的に長期不況が続く時代にあって、『ONE PIECE』をはじめ、『週刊少年ジャンプ』連載漫画の記録はとどまるところを知らない。ジャンプワールドの拡大。一方、2006年、インターネット・ビジネスにも進出、デジタル出版室、ブランド事業部などが新設された。新事業にも積極的に取り組み、さらなる挑戦はこれからも続く。



2013

株式会社 中央経済社

(英文社名 CHUOKEIZAI-SHA, INC.)

会社概要

会社設立	1948年(昭和23年)10月13日 1997年(平成9年)店頭上場【現・東京証券取引所 JASDAQ(スタンダード)／証券コード9476】
本社所在地	東京都千代田区神田神保町1-31-2(〒101-0051)
関西支社	大阪市北区曽根崎新地2-3-13若杉大阪駅前ビル(〒530-0002)

会社のあゆみ

創業から65年にわたって経営社会の変化とともに歩んできました

◆1948～1954 (昭和20年代)

1948年10月当社設立。経済復興の基盤となる企業の会計・税務を全国に広める出版活動。

◆1955～1964 (昭和30年代)

生産性を向上させる経済社会のニーズを受けて経営の管理問題をテーマに出版活動展開。大学教育の充実の求めに応じたテキストの積極開発。

◆1965～1974 (昭和40年代)

コンピュータ化がすすむなかで新しい経営が開発された。情報管理を出版ジャンルに取り込む。

◆1975～1984 (昭和50年代)

日本的経営が世界から注目され、当社の一連の日本的経営書群がブームをつくる。与えられる知識から自分で開発する知識の時代—ビジネス書の誕生と隆盛。

◆1985～1989 (昭和60年代)

経営の国際化に伴う新しい実務法務を解き明かす出版開発活動。ディスクロージャー問題にリーダーシップを発揮。

◆1990～2000 (平成年代)

1997年株式店頭上場。日本版ビッグバン＝フリー・フェア・グローバルをキーワードにした変化の波を出版開発で全面カバー。電子出版への途を開く。

◆2001～2013 (21世紀)

一連の会社法大改正をフォローした解説書・実務書の開発で新分野を開拓。現在に至る。

出版エリア

経営－Management／会計－Accounting／商業－Commerce／ビジネス・実用－Business&Practical Use
経済－Economic／法律－Law／税務－Taxation／資格・検定試験－License

創業昭和9年 日本の文学・歴史・書誌ならおまかせ！

八木書店

古書出版部

日本古書通信社



私 どもは日本の文学・歴史・書誌の分野に特化して書籍を取り扱っています。昭和9年、日本古書通信社および八木書店の前身・六甲書房が創業し、今年で79年を迎えます。

古書部門は、刊記の分かる世界最古の印刷物百万塔陀羅尼(奈良時代・770年)から夏目漱石など近代作家の肉筆類まで、1200年もの間、日本文化を育んできた古書・稀観書を扱います。

日本古書通信社は、月刊誌「日本古書通信」を発行し、本年11月に通巻1000号を迎えます。古本と古本屋の話満載の「真の本好きのための雑誌」です。

出版部門は、日本文学・歴史を中心に、学術資料の高精度な複製、翻刻および電子出版を手がけています。2006年には、『徳田秋聲全集』全43巻を完結し、菊池寛賞を受賞しました。ぜひ日本文化の息吹を感じ取ってください。

略年表

- 1934年(昭和9) 日本古書通信社を創業
- 1935年(昭和10) 全国古本屋聯合会古本販売員録 創刊
- 1944年(昭和19) 『日本古書通信』休刊、『読書と文庫』と改題
- 1947年(昭和22) 『日本古書通信』復刊
- 1953年(昭和28) 株式会社八木書店と改称
- 1961年(昭和36) 古書部開業
- 1971年(昭和46) 天理図書館善本叢書 刊行開始
- 1977年(昭和52) マイクロ版近代文学館 刊行開始
- 1984年(昭和59) 『きりしたん版落葉集』(1598年)のち重文指定 販売
- 1988年(昭和63) 『正倉院古文書影印集成』刊行開始
- 1991年(平成3) 『奈良絵本村松物語絵巻』(江戸時代前期) 販売
- 1993年(平成5) 『夏目漱石遺品コレクション』販売
- 1993年(平成5) 『義太夫年表近世篇』毎日出版文化賞特別賞受賞
- 2000年(平成12) 『徳田秋聲全集』
- 2007年(平成19) 『東大寺開田図』越中国射水郡鳴戸村薬田図 販売
- 2009年(平成21) 『日本書紀』(八木福次郎) ゲスナー賞受賞

古書

上代から近代までの古書・稀観書

古 書販売部門では、万葉の昔から近代までの古書・稀観書を取り扱います。特に文学・書誌学の元資料の収集に努めています。



夏目漱石草稿『土』に就て』
190字詰漱石山房用箋21枚完、6,800,000円

長塚節の代表作『土』(明45)の序文。文豪漱石が新進作家の後押しをした形になります。いわゆる「修善寺の大患」の後であり、厳しい状況なかでの執筆だったと思われます。



百万塔及び心印陀羅尼經(短)

神護景雲4年刊(770年)、一基一巻 6,800,000円

称徳天皇の発願による職種挽き木製三重小塔。内部には陀羅尼經が納められています。相輪及び塔身底部に墨書があります。また経文書包紙、法隆寺の讀渡証、関連資料が付きます。

出版

学術資料の高精度な複製・翻刻

日本古典の宝をカラーで写真複製!
『尾州家河内本源氏物語』全10巻
B5判上製・揃定価294,000円、刊行中
数ある源氏物語の古写本のうち、河内本の最古のもの(名古屋蓬左文庫所蔵・重要文化財)を高精細カラーで再現。



菊池寛賞・出版辞会新聞社学芸文化賞ダブル受賞!
『徳田秋聲全集』全42巻+別巻
A5判上製・揃定価444,780円、完結
明治20年代から昭和18年まで常に日本近代文学の第一線でその根幹に位置した大文豪の全貌を収録!

雑誌

通巻1000号! 古書店と読者を結ぶ「日本古書通信」

和9年1月の創刊以来、78年間、古書店と古書ファンのために、たゆまず発行し続け、今年11月に通巻1000号を迎えます。

稀少古書の紹介、新発見資料の報告、蔵書・書斎の話、集書家の思い出、古書店主の体験談、古書店探訪記、珍本掘り出し話、その他、著作目録や研究文献目録の書誌類、そして、全国の古本屋による通販古書目録など、全て書物の話題で埋め尽くされています。

情報はネットが主流となりましたが、広い分野をカバーする本誌記事を読み続けることで、自然に古書に関する知識が深まっています。今後も誌面の充実を努めます。よろしくご支援のほどお願い申し上げます。



創刊号(昭和9年1月)



八木書店 Web <http://www.books-yagi.co.jp>

古書部 Tel 03-3291-8221 Fax 03-3291-8223 E-mail kosyo@books-yagi.co.jp

出版部 Tel 03-3291-2961(営業) -2969(編集) Fax 03-3291-6300 E-mail pub@books-yagi.co.jp

日本古書通信社 Web <http://www.kosho.co.jp/kotsu/> Tel 03-3292-0508 Fax 03-3292-0285 E-mail kotsu@kosho.co.jp

理論社 創作児童文学のあゆみ



敗戦後の1947年、焦土と化した日本に「豊かな種子をまこう」との思いで、理論社は誕生しました。

やがて種子は芽生え、子どもたちを育む児童文学が豊かに花開きました。その後、東西冷戦の終わりとともに、日本も世界も、21世紀は大きな変動の時代を迎えています。3.11大震災の体験は、わたしたちの生き方や価値観、文明観までも問い直しているようです。子どもたちの環境も、こうした状況を反映し、また大きく変化しています。

激動の時代にあって、いま子どもたちに必要なのは生きる喜びとなる一冊の本です。人びとの英知と真理を、子どもたちに、たのしく、おもしろく伝える本だと思います。私たちはこれからも、未来と世界をみつめながら、本をつくり続けていきます。

理論社

START!

神保町と近代出版100年 出展リスト

展示番号	出版社名	出展品
1	岩波書店	『こゝろ』 夏目漱石 1984(昭和59)年9月刊行の復刻版／初版は1914(大正3)年9月刊行
2		『おらが春・我春集』 一茶 1927(昭和2)年7月刊行
3		『奉天三十年』上 クリスティー 1938(昭和13)年11月刊行
4		『広辞苑』初版 1955(昭和30)年5月刊行
5		『世界』創刊号 1946(昭和21)年1月刊行
6	有斐閣	『六法全書』平成25年版 西田典之, 高橋宏志, 能見善久編集代表 2013(平成25)年3月刊
7		『有斐閣判例六法Professional』平成25年版 西田典之, 高橋宏志, 井上正仁, 能見善久編集代表 2012(平成24)年11月刊
8		『有斐閣判例六法』平成25年版 井上正仁編集代表 2012(平成24)年10月刊
9		『ポケット六法』平成26年版 井上正仁, 能見善久編集代表 2013(平成25)年9月刊
10		『新社会学辞典』森岡清美, 塩原勉, 本間康平編集代表 1993年2月刊
11		『マルチテラル心理学≡CD-ROM』中島義明, 繁榎算男, 箱田裕司, 安藤清志, 子安増生, 坂野雄二, 立花政夫編 2006(平成18)年4月刊
12		『わたくしたちの憲法』宮沢俊義, 国分一太郎著, 堀文子絵 1955(昭和30)年5月刊
13		『わたくしたちの憲法』宮沢俊義, 国分一太郎著 1983(昭和58)年2月刊
14		『新書 わたくしたちの憲法』宮沢俊義, 国分一太郎著 1987(昭和62)年4月刊
15		『注釈民法』第1巻 谷口知平編 1964(昭和39)年11月刊
16		『憲法撮要 改訂版』美濃部達吉著 1946(昭和21)年刊
17	『憲法撮要 改訂5版』美濃部達吉著 1932(昭和7)年1月刊	
18	東京堂出版	『新刊図書雑誌月報』1914(大正3)年～1926(大正15・昭和1)年
19		『東京堂月報』1927(昭和2)年～1941(昭和16)年
20		『読書人』1941(昭和16)年12月創刊～1944(昭和19)年4月終刊 一時再刊1951(昭和26)年4月～12月
21		『出版年鑑』(東京堂版) 1930(昭和5)年～43(昭和18)年、1947・48(昭和22・23)年
22		『民俗学辞典』柳田国男監修／民俗学研究所編 1951(昭和26)年
23	『類語辞典』広田栄太郎・鈴木棠三 編 1955(昭和30)年	
24	二見書房	『女のいくさ』1963(昭和38)年
25		『エマニエル夫人』1969(昭和44)年
26		『白い本』1972(昭和47)年
27		『まんが日本昔なばし』1976(昭和51)年
28		『裏ワザ大全集 スーパーマリオブラザーズ1』1985(昭和60)年
29	『読めそうで読めない間違いやすい漢字』2008(平成20)年	
30	三省堂	ウェブスター氏新刊大辞書『和訳字彙』1888(明治21)年
31		『英和袖珍新字彙』1890(明治23)年
32		『漢和大事典』1903(明治36)年
33		『辞林』1907(明治40)年
34		『日本百科大辞典』1908(明治41)年～1919(大正8)年
35		『袖珍コンサイス英和辞典』1922(大正11)年
36		『明解国語辞典』1943(昭和18)年
37		昔のブックカバー
38	昭和8年頃「学生のデパート」として売り出していた頃に使用していた包装紙	

神保町と近代出版100年 出展リスト

展示番号	出版社名	出展品
39	平凡社	『ポケット顧問 や・此は便利だ』 下中弥三郎 1914(大正3)年
40		『大百科事典』1(全28巻) 1931(昭和6)年
41		『太陽』創刊号 1963(昭和38)年7月
42		東洋文庫1『楼蘭-流砂に埋もれた王都』A・ヘルマン著 松田寿男訳 1963(昭和38)年創刊
43		『字通』 白川静著 1996(平成8)年
44	日本文芸社	『高血圧・低血圧・動脈硬化』 横田良助著 1961(昭和36)年6月初版刊行
45		『便秘はこれで治る』 伊沢光三著 1961(昭和36)年6月初版刊行
46		『胃腸病の新しい治し方』 佐藤三樹雄著 1965(昭和40)年7月初版刊行
47		『<実用版>現代国語辞典』 松枝茂夫・古田東朔監修 1978(昭和53)年3月初版刊行
48		『和田アキ子だ 文句あつか?』 和田アキ子著 1983(昭和58)年9月初版刊行
49		『無能の人』 つげ義春著 1988(昭和63)年5月初版刊行
50		『蝶とヒットラー』 久世光彦著 1993(平成5)年4月初版刊行
51	『酒のほそ道』 ラズウェル細木著 1996(平成8)年2月初版刊行	
52	小学館	『少年サンデー』創刊号 1959(昭和34)年
53		『コロコロコミック』創刊号 1977(昭和52)年
54		『週刊ポスト』創刊号 1969(昭和44)年
55		『女性セブン』創刊号 1963(昭和38)年
56		『小学一年生』1925(大正14)年10月号
57	集英社	AKB48大島優子の直筆感想文
58		荒木飛呂彦「ジョジョの奇妙な冒険」原画
59		被災地で回し読みされた、伝説の『少年ジャンプ』
60		女性誌『MORE』創刊号 1977(昭和52)年7月
61		女性誌『non・no』創刊号 1971(昭和46)年6月
62	中央経済社	『簿記要論』 木村重義 1963(昭和38)年2月
63		『会計理論の基礎』 不破貞春 1961(昭和36)年6月
64		『体系会計諸則精説』 蔦村剛雄 1967(昭和42)年7月
65		『会計監査論』 山浦久司 1999(平成11)年5月
66		『はだか随筆』 佐藤弘人 1954(昭和29)年10月
67	八木書店	『徳田秋声全集』(全43巻+別巻) 編集委員: 紅野敏郎・松本徹・宗像和重・田澤基久・紅野謙介・十文字隆行・小林修 2000年刊行開始、2006年全巻完結
68		『近代歌舞伎年表』名古屋篇(全17巻+別巻1) 国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編 2007年刊行開始(既刊7冊、刊行中)
69		『史料纂集』古記録編・古文書編 1967年刊行開始(既刊215冊、刊行中)
70		『尊経閣善本影印集成』前田育徳会尊経閣文庫編 1993年刊行開始(既刊53冊、刊行中)
71	理論社	『きりん』 日本童詩研究会編 1948(昭和23)~1971(昭和46)年
72		『季刊 理論』 小宮山量平編 1947(昭和22)年
73		『荒野の魂』 斎藤了一著 1959(昭和34)年
74		『チョコレート戦争』 大石真作 1965(昭和40)年
75		『ぼくは王さま』 寺村輝夫作 1961(昭和36)年
76		『北の国から』 倉本聰著 1981(昭和56)年
77		『兎の眼』 灰谷健次郎作 1974(昭和49)年



神保町と近代出版100年(2013)

(第 50 回 明治大学中央図書館企画展示)

編 集： 中央図書館ギャラリー企画運営 WG

発 行： 明治大学図書館

発行日： 2013 年 10 月 10 日